

## カズオ・イシグロ『夜想曲集—音楽と夕暮れをめぐる五つの物語』 —短篇集構想の意図—

佐々木 典子

本発表では、カズオ・イシグロの標題作を取り上げ、初の短篇集形式によるこの最新作を「話の寄せ集めではなく、一つの物語、一冊のアルバムとして読んでほしい」と述べた作者の短篇集構想の意図を探り、これが長篇創作に疲れた作者の単なる息抜きの作品ではなく意欲作であることを論じた。

第4作『充たされざる者』出版直後の評価が芳しくなかったとき、イシグロは、これは自分の最高傑作でありこの作品で自分は遂に快心のスタイルを構築したと述べ、その後も、自分は作品ごとに新しい自分の「声」を見つけ、違った形を作り出すよう意識していると繰り返し述べている。この一作ごとに新たな創作の可能性に挑もうとするイシグロの意欲が、第7作目に「声」を与え、短篇集という形を誕生させたのである。

さて、イシグロの新たな「声」であるこの短篇集には、作者のこれまでの作品と共通のテーマが流れている。夢や理想と現実のはざまで生き方を模索する人間の苦悩の容認をテーマとするイシグロの姿勢は、『夜想曲集』でも一貫している。5篇の登場人物達は、「ありたい自分とそうではない自分」の違いに悩み、その苦悩から抜け出そうと模索し、行く手が見えぬまま現実との折り合いをつけ自分を納得させている。副題の「夕暮れ」は、自分の理想や現実とのギャップ、自分の可能性への期待とそれを裏切る結果とのギャップ、才

能と努力とのギャップ、自己と他者との現実認識のギャップという、人生において我々が限りなく味わい続ける「隔たり」、充たされない思いを象徴している。

注目すべきは、イシグロが5篇の人物達の年齢層を書き分け、人の一生の流れを浮かび上がらせ、それによって短篇集『夜想曲集』に「連続性」を与えている点である。確かに「夕暮れ」という言葉から「人生のたそがれ」を連想することは可能であるし、第1話の邦題も『老歌手』ではあるが、イシグロの視線は、人生の終盤にある人間だけに注がれているのではない。そもそも、第1話の原題の“Crooner”という語は、「老い」の意味を含まない。イシグロは、5篇に20代、30代、40代、50代、60代の人物を配し、人が夢や理想と現実との折り合いをつけながら生きる姿を、人の一生のスパンで捉えている。

以上発表前半では、5篇全体のテーマに連続性があることを例証し、後半では、『夜想曲集』の構成の連続性に言及した。

これまでの作品同様、『夜想曲集』にも、副題の「音楽」のモチーフが活かされており、時代背景や親子の絆や人物の心情等を直截に読者に訴える音楽の効果や、人の出会いの契機となる音楽の効果や、人と人との共感の源にも相克の要因ともなる音楽の効果が用いられている。しかし、『夜想曲集』に特有なことは、「音楽」がバックコー

ラスとなって5篇の進行を司り、登場する歌の歌詞のメッセージが、第1話から第2話へ、或いは第1話から第4話へと物語を繋ぎ、5篇に「連続性」をもたらしている点だ。

さらに『夜想曲集』の構成には、「季節」と「場所」の循環と共に、第5話から第1話へと戻るような「語り」の循環の周到な設定があり、5篇は、時と場所を超えて繰り返され連続する物語となり、5篇の人物像は、人の一生のある時ある場所での姿であると同時に、どこの誰の姿でもあり得る仕掛けとなっている。

イシグロは、5人の語り手を配した短篇5篇に、連続性と循環性を編み出し、物語全体の普遍性を浮かび上がらせている。短篇集『夜想曲集』は、「一人の語り手によって一人の人間が生きた時間と場所という限られた時空で語られる物語」の「枠」を超えることを試みたイシグロの意欲作である。そして、その意図どおりに、テーマの一貫性と構成の連続性を持つ5話5曲からなる「一冊のアルバム」となっている。

(会員)